ドラゴンクエスト～世界は砕けて千切れて混ざる～

鈴亜サクサク

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

謎の建物がある小さな孤島で目覚めた少年竜仁。

元の世界へ戻るため、砕けて千切れて混ざったドラゴンクエストの世界を旅する

目次

始まりの虚空孤島
はじまりの島 ―― 1
モンスターとのエンカウント ―― 4
孤島の魔物集落 ―― 8
竜仁のドラゴンクエスト ―― 11
死霊が支配したアレフガルド
死霊が蠢く町 ―― 14
VSしにがみのきし ―― 18
ゾンビフィールド・ラン ―― 21
火山拝みし熱森林
猛暑の森 ―― 24
サザレは知っている ―― 27
ギルドの町シズニアン
シズニアンの町、夕〜夜 ―― 29
シズニアンの町、夜、酒場 ―― 32
シズニアンの町、朝、ギルド ―― 35

始まりの虚空孤島

はじまりの島

天は薄紫、眼前に広がるは彼方まで伸びる虚空。
ここがどこだかは分からないが、少なくとも自分が知っている所ではないと、苔が付着した石畳の上に座る高校生くらいの少年夜坂竜仁（よざかりゅうじ）は確信した。
「何でこんなとこにいるんだ？」
さっきまではコンビニへの道中を歩いていたのを竜仁は覚えている。
スマホと財布を持っていたはずだが、どちらも手元からは失くなっていた。
「事故った……にしては痛かった記憶もないしな」
尻と手に触れる石の硬さと冷たさは夢では無くこれは現実なのだと告げる。
現実だとしたらここはどこなのだろうか。
竜仁は思考を巡らせたが、答えは見つからず、ひとまずここが無人島だということにして保留。
そして間髪いれずに次の問題が浮かび上がった。
「どうやって生きていけばいいんだろ」
救助……来てくれるのかも定かではないが、それまでに死んでしまっては元も子もない。
必要なのは食糧と水。出来れば雨風凌げる住みか。
竜仁は海を探すために目を凝らして虚空の方を見つめたが、海らしき青はどこにもなかった。
そもそも島の端から先がない。
海の恵みは頼りにならないことに気を落とすのと同時に、自分のいる場所の異常さを再認識する。
「日本……いや、地球かすらも怪しくなってきたな」
呟きは誰にも聞かれることなく虚空に潰えた。

仮に地球のどこかの孤島だとしても南極北極だとしても大陸の端には海があるはずだ。
しかし、この島の端から外に広がるのは落ちれば助からないような奈落。
島の端が切り落とされて、そこから先が無くなってるような感じだ。
ともかく海の恵みに頼れない以上、島内を探索して、果実や綺麗な水源を確保しなければならない。
人が住んでる場所を発見出来ればなおよし。
猛獣が潜んでるかもという危険は百も承知だが、不確定な危機に怯えて動かず餓死を待つよりはましだという判断だった。
「よいせっと」
なんにせよ座ってるだけでは何も進まないと、竜仁はズボンに付いた苔を払い落とし立ち上がる。
どうやら竜仁がいる場所は無人島の中でも高所らしく、上り下りするだけでも時間が掛かりそうな長い下りの階段が目に入る。
気になって後ろを振り返ってみれば、崩れている箇所はあるものの、神聖な雰囲気を感じる石造りの建造物があった。
入口を塞ぐものはなく、誰の侵入も拒まない。
「しばらくはここを拠点に使わせてもらうか」
罰当たりかとも考えたが、正体不明の島でのサバイバルでそんなの気にする必要はないと一蹴する。
それでも竜仁は「しばらくよろしくお願いします」と、いるか分からない神に挨拶をした。
幸運にも住みかはすぐに見つかったのであとは食糧と水。
早いとこ見つけれればいいなと思いながら、竜仁は所々崩れかけた階段を足を滑らせないようにゆっくりと降りていく。
◇
薄紫色の空の天高く。
石の建物の真上に位置する場所に丸型の黒い空間が現れた。
その空間から鉤爪を持った水色の三本指が這い出て、黒い空間を掴

むな否や一瞬にして空間を閉ざした。

島に住む全ての生命がその出来事に気付くことはなかった。

モンスターとのエンカウント

島の探索を開始してわずか三分。
竜仁は島の南方に生い茂る森林にて自分以外の生命体との遭遇を果たした。
ただし、不幸な方の。
相手はそんなこと露知らずな様子で、咄嗟に竜仁が隠れた木の横を通り過ぎた。
「あれってドラクエのモンスターだよな……」
竜仁は今の生物を見たことがあった。
赤いワンショルダーを着た青い毛皮の狼男。その名はリカント。
所謂雑魚敵の部類だが、竜仁はゲームの中の敵が自分の目の前を通ったことに衝撃を受け、声こそ出さなかったものの、リカントが木々に隠れて見えなくなるまで呆然と立ち尽くしていた。
「ハハッ、ゲームの中の世界ってことかよ」
状況が理解しきれず、場違いなのは本人も分かっていたが、思わず乾いた笑みをこぼしていた。
その後ろをバサバサと何かが羽ばたく。
それに驚いて反射的に後ろを見ればかろうじて蛇の胴体があったのを確認する。
「今のは……キメラか？」
ハゲタカの頭に蛇の胴体を持つ怪鳥。
それが二羽、三羽と次々に木々の間を縫って飛んでいく。
キメラが見えなくなったあと、目ざとい竜仁は通っていた場所に生える木には一枚の羽が引っ掛かっているのを発見した。
キメラのつばさ。
使用すると訪れたことのある町などに瞬時に移動できる道具だ。
竜仁もその効果を知っており、キメラの後続が来ないのを確認したら急いで羽を回収しにいった。
「一枚だけか」
他に何枚か落ちてないか地面を見渡したが、土と枝と葉だけでキメ

ラの羽は木に引っ掛かった一枚しかなかった。
残念なことに羽が数枚集まらないと本来の効果は発揮しない。
竜仁も今までのドラクエの知識からキメラのつばさが羽一枚では足りないと察しており、役に立たないと分かっていながらも捨てる理由もないと、ズボンのポッケに仕舞った。
「にしても、ドラクエの世界か。それだけはありがたいかもな」
竜仁はゲームでのドラゴンクエストをいくつかプレイしたことがある。
故に道具やモンスターについての前情報はそれなりにあった。
が、それ故に疑問も出る。
「どの辺のモンスターなら倒せるんだ？」
腕っぷしは人並みの竜仁。
自分の実力でどのモンスターなら相手出来るかを測りあぐねていた。
「まず、リカントとかキメラは無理だろ」
自分がレベル1だと仮定して、最初のフィールドに出てくるような魔物ではないこの二体は無理だと断定。
もしこいつらがこの島の平均だとしたら早々に島を脱出しなければというとこまで行き着いて気分を重くする。
「そんな事は今はいいんだって」
話を戻す。
この場でばったり出くわしても勝てるモンスターとなると、やはりスライムやドラキーが竜仁の頭の中に浮かんだ。
それでも無傷の勝利は厳しいだろう。
「やっぱ、隠れ身生活かぁ」
今日出会ったモンスターはたった二種類だが、どちらにも感付かれてすらいない。
偶然かもしれないが、モンスターにも根気よく探すつもりもないので、へまをしなければバレることはない。
そう結論付け、探索を再開しようと足を踏み出したところで竜仁の度肝を抜く一言が投げ掛けられた。

「に、人間か!?」
「ヴァッ!?」
声が聞こえたのは後ろから。
誰もいないとたかをくくってたのに人に話し掛けられたら誰でもどんな言葉でも驚くだろう。
竜仁は声の主を知ることもなく距離がある今の内に逃げ出そうとした。
「待て待て！　別に取っ捕まえようって訳じゃねえよ！」
「殺すってこと!?」
「違うっ！　オレの話を聞いてくれぇ！」
最早隠れることは頭から抜けた竜仁は全力で走った。
しかし、追いかけっこの最中の問答の末に命を狙われてる訳ではないと知り、ようやく足を止めて後ろを振り返る。
「やっと止まったか」
声の主はリカント。
最初に見たリカントとは違い、赤いベリー系の果実が盛られた籠を持っている。
果実を落とさないように走り、立ち止まった竜仁に追い付いた。
「人間、お前どっから来たんだ？」
「日本……っす。来た方法は分からないです。いつの間にかここに」
「ニホンってのは聞いたことねぇな」
竜仁は帰る手掛かりが少しでも掴めるかと心の奥底で思っていたが、そう甘くはなかった。
そして、いつの間にかこの島にいたという話を聞いたリカントは怪訝な顔もせず、理解したという風にある提案を出した。
「オレ達の集落に来てくれよ。だいまどう様ならなんでも知ってるはずだし」
「何が目的です？」
「外の情報がほしいんだ。お前も色々知りたいことはあるだろう？」

情報の交換。
モンスターの住みかに丸腰で入るのは躊躇ったが、判明している情報がドラゴンクエストの世界とだけの現在、竜仁にとってこの島について知れるだけでも価千金の成果だ。
リカントが話が通じる相手だったということもあり、他の魔物も出会ってすぐに襲いかかってくる輩ではないと信じ、竜仁は大きく頷いた。
「案内頼みます」
「よし、任せろ！」
リカントが走る後を竜仁が追う。
森林を抜けた先にあったのは白いテントが立ち並ぶ空間だった。

孤島の魔物集落

人間である竜仁が来たことによって小さな集落は一斉にざわめき出す。
それでも珍しいものを見るかのように様子を伺ってるだけで問答無用で襲いかかってくるような魔物は一匹もいなかった。
「本当に襲ってこないんだ」
「だろ？　俺達に人間を襲う理由なんてないしな」
とりあえずの身の安全を得れた事に竜仁は安堵の溜め息をこぼす。
下手を打たないようにと無意識に使っていた敬語もいつの間にか無くなっていた。
「あの色付きテントにだいまどう様はいるはずだぜ」
白いテントに紛れて一つだけ立っている黄色いテント。
その入口を守るようにして立つ青い鎧を着込んだ魔物、よろいのきしが竜仁を睨んでいた。
あの人間が少しでも怪しい動きをしたら即刻取り押さえるという心意義だろう。
「止められるんじゃないのか？」
「大丈夫だ。あいつは話せば分かってくれる」
あちこちから視線を浴びながらリカントと竜仁は黄色いテントへと近付いていく。
しかし、よろいのきしがテントの前に立ち塞がり、そう簡単には入れさせなかった。
「待て、人間を連れて何の用だ」
「だいまどう様に話を聞きにいくんだ。もしかしたら新しい世界の手掛かりが見つかるかもしれないぜ？」
「なるほど……だが」
よろいのきしの大きな手が竜仁の体に当てられる。
「な、なんだ？」
「ボディチェックだ。武器の類いは預からせてもらう」
くまなく竜仁の体が調べられたが、出てくる物はさっき森で拾った

キメラの羽一枚だけ。
「貴様、これでどうやってこの島まで来たんだ！」
集落に響く、よろいのきしの低い声。
その答えを知る者はここにはいない。
「どうにもこうにも、いつの間にかここにいて……」
「アレフガルドから来たのではないのか？」
アレフガルド。それはドラゴンクエストの始まりの地だ。
今日竜仁が出会った魔物は全てアレフガルドが冒険の舞台であるドラゴンクエスト1に登場している。
しかし、その情報を知っているだけで竜仁はアレフガルドとは微塵も関わりがない。
よろいのきしの質問には肯定の意味で頷き、日本から来たのだと付け足した。
「ニホン……か。聞いたことない世界だな」
「だろ？　だからだいまどう様なら何か知ってるかとおもってさ」
「あい分かった。しかし人間よ、もし粗相を働いたら……分かってるな？」
テントの中に入る許可が出された。
が、竜仁は脅しを入れられてビクビクしながらテントに入ることとなった。
リカントは半ば押し付ける形で果物篭を渡してから中へ。
テントの中は端にいくつかの樽が並べられ、床全体を覆うカーペットが敷かれているだけの質素なもの。
件のだいまどうはテントの中央に静かに座していた。
「いらっしゃい、人間」
テントと同じ黄色いローブに包まれて素顔は分からないが、声から女性なのだと竜仁は想像する。
「まずは自己紹介から。私はレレマラ。まぁ呼びやすいように呼んでください」
「竜仁です。見ての通りただの人間っす」
竜仁とリカントは座るよう促されたので、それに従ってカーペット

の上に腰を下ろす。
「さて、中から話は聞かせてもらいました。あなたが言っていたニホン。それはここから遥か彼方。もしかしたら別の次元の世界かも知れません」
「つまりは……すぐには帰れない？」
「残念ながら……いくつもの世界を渡らないといけないでしょうね」
落ち着いた声質で伝えられた事実。
竜仁もある程度覚悟はしていたが、改めて目の前に突き付けられ悲観し、己の運命、そしてこんな所に連れてきた犯人を架空で作り上げ、恨んだ。
「でも、二度と帰れないって訳ではないと」
「左様。それに、私達も力を貸しますよ」
竜仁の隣に座っていたリカントも深く頷く。
絶望の淵に立たされていても、希望はまだ潰えていない。
その事実は竜仁にとって何よりもありがたかった。

竜仁のドラゴンクエスト

百聞は一見に如かず。
竜仁がすべきことは直接見せた方が早いと、レレマラに連れられて高所の神殿まで足を運んでいた。
この島に降り立った時、拠点にしようと考えていた建築物だ。
竜仁の腰には集落でもらった革袋が付けられており、キメラのつばさ数枚と島で採れた木の実が入っている。
「この神殿に何があるんです？」
「他の世界に繋がる旅の扉です。生憎この島には神殿内の一つしか存在してません」
薄暗い神殿内部をレレマラが唱えたレミーラで照らしながら奥へ奥へ。
危険なモンスターもいなければ罠もない平和な道中。
その道すがらに旅の扉の行き先。竜仁の冒険の始まりの地についてレレマラから説明がされる。
まずこれから向かう地の名はアレフガルドだということ。
先程、よろいのきしがアレフガルドから来たのでは無いのかと聞いたのは普通ならそこしか出入口がそこしかないからだと竜仁は納得した。
そして、今のアレフガルドは死霊族の魔物の軍団に支配されており、りゅうおうの軍勢と戦いが繰り広げられていることを知る。
人間はほとんどが危険なアレフガルドを去ったか、死霊の軍団の下についたそうだ。
「そんなところに俺なんかが行っても大丈夫なんだろうか……」
「勿論手ぶらで向かわせるつもりはありません。もうじきあれの準備が済む頃でしょう」
二人がアイテムを用意し、ここに来る前にレレマラの指示で案内役のリカント含めた数体の魔物が先に神殿の奥に向かっていた。
神殿は大して広くないようで、先行している魔物達に追い付いたのはそれからすぐの出来事。

「おおっ、でけぇ」
円形の広間の中央にはどこか神秘的にも感じる水色の渦巻き。アレフガルドへと繋がる旅の扉だ。
しかし広間に入り、竜仁が最初に見たのはその奥に眠るレンガの巨人、ゴーレムだった。
「おっ、来た来た」
ゴーレムの陰から数体のリカント。皆同じように土埃で体を汚している。
「どうですか？　ゴーレムの起動準備は」
「おうっ、準備万端ですぜ！」
準備万端と言われたゴーレムは目に光は灯っておらず、竜仁にはこれから動くビジョンが浮かばなかった。
すると、レレマラが旅の扉を避けてゴーレムへと近付いていく。
「さて、竜仁さん。アレフガルドに着いたら西に進んでドムドーラ、もしくは東に進みリムルダールに向かってください。そこにまた別の旅の扉があるはずです」
レレマラが杖を頭上に掲げると、先端に付いた宝石に光が集う。リカント達は巻き込まれまいとゴーレムから離れていった。
何らかの魔法を唱えながらも説明は続く。
「アレフガルドを抜けたら、どこか人里を探すのです。それから頼みごと（クエスト）なのですが、私達が新たに住める場所を見つけてきてください」
「それは……どうして？　この島も住み心地は悪くなさそうだけど」
「最近島が徐々に崩れ落ちていましてね。今のペースなら先の話でしょうが手遅れになる前に手を打ちたいのです」
竜仁にその頼みごとを断る理由はなかった。手助けしてくれた優しきモンスターを助けてやりたい。その意思と共に静かに頷いた。
「ありがとうございます。皆で期待してますよ」
レレマラは杖の先端の光をゴーレムに放出した。
虚ろだった目に白い光が宿り、その巨体をゆっくりと力強く起き上

がらせる。
立ち上がったその巨体はかつて都市の守り神だった情景が容易に思い浮かぶ。
竜仁はゴーレムが心強い味方となることを確信した。
「これに乗ってけば安全かな？」
「そうですね。ですが仮に竜仁さんが命の危機を感じたらゴーレムを捨ててでもキメラの翼を使ってくださいね」
竜仁は早速ゴーレムに乗ろうと思ったが、巨大すぎて乗れないという問題が発生した。
「えーと……しゃがめる？」
答えは返ってこない。しかし、声は届いたようでゴーレムは音を立てながらしゃがむ。
それでも背伸びやジャンプしても届かない程には大きい。竜仁はなんとか背中をよじ登り、ゴーレムの頭上に腰を下ろした。
「ちょっと待った。立ち上がられたら俺潰されるよなこれ」
気付いた時にはゴーレムは既に動き出していた。
ただし、竜仁を天井で潰さないように姿勢を低くしている。
思わぬ危機は杞憂に終わった。
「そろそろお別れですね。近い内に再開出来ることを願ってますよ」
「竜仁！　頑張れよ！　良い知らせ待ってるぜ！」
ゴーレムが旅の扉の上に乗ると、光の渦が強まって辺りの景色が歪んでいく。
「行ってきます！」
その言葉を最後に竜仁とゴーレムは神殿から消え去った。
一人の少年のドラゴンクエストがここで始まった

死霊が支配したアレフガルド

死霊が蠢く町

旅の扉の出口。そこは影に覆われた町だった。
ただし、人の姿は無いし、気配すらもない。悲しくなるほどに静かな町だ。
だが建物には破壊されたような跡はなく、探せば人の一人や二人はいそうな雰囲気でもある。
上を見上げれば、ひたすらに巨大な紫色の物体が浮いている。正確には何処からか伸びる糸のようなもので持ち上げられていた。
もし支える糸が千切れでもして紫の物体が落ちてきたら竜仁もゴーレムも逃げることは叶わず押し潰されるだろう。
それよりも危惧すべき驚異はすぐそこにあった。
「話合いは……出来そうもないか」
そこかしこから生気なくゆらりゆらりと湧き出る死霊達。
がいこつやドロル、ボーンバットなんかもいる。
そいつらは自分達とは種族が異なる竜仁達を排除すべく行軍を始めた。
中でもボーンバットは空を飛べることを活かして直接竜仁を襲う。
「散れ散れっ！」
追い払おうと闇雲に腕を振り回すも、ただの一少年の抵抗はお構いなしに頭突きをかまそうとした。
「ゴーレム！　こいつら追い払ってくれ！」
竜仁が命令するとゴーレムは拳を構え、向かってくるボーンバットに強烈なパンチを食らわせた。
硬い拳からの一撃でボーンバットは軽々とふっ飛び、地面に落下した所で青い光となって消える。
「ってうおっ、危なっ！」
もう二匹が竜仁目掛けて突進。
身を屈めて回避したところに、地面のドロルが毒液を打ち上げた。

竜仁に直撃はしなかったものの、ゴーレムの肩に毒液が当たり、飛び散った飛沫を浴びてしまった。
「うげぇっ、汚ねぇ」
物理的なダメージは少ないが、妙な生臭さとネバネバが竜仁の精神面に大きなダメージを与えた。
しかし、ネバネバを気にしている暇なんてものはなく、追撃はまだまだ終わらない。
ゴーレムが竜仁に攻撃が届かないよう何とか凌いでいるが、上下左右からの攻撃に対処が追い付かなくなるのは明らかだった。
「早く離れよう！　正面突破だ！」
竜仁の頭の中からどの方角に新たな旅の扉があるのかは既に抜けていた。
死霊の包囲網が比較的薄い箇所を指差すと、ゴーレムは両腕を左右に広げ、そのまま突進。
圧倒的な力で建物ごと死霊をなぎ倒し活路を切り開いていく。
進む先にも死霊が待ち構えていたが、戦車のような勢いで突進するゴーレムに敵う者はいなかった。
いよいよ包囲を抜けて町から脱出しようとする竜仁達に立ち塞がったのは外周を囲う強固な壁。
本来ならモンスターの襲撃から町を守るための物だろうが、今はその強固さが仇となっている。
「ゴーレム、突き破れ！」
ここまで竜仁の命令には従ってきたゴーレムだが、今回は壁を前にしばらく立ち止まった後、進路を左に変えて猛進を続けた。
進む先には一ヶ所、壁が広範囲にかけて崩れている所が存在している。そこから町を脱出しようとしてるのだろう。
「壊したくない感じか」
この行動で竜仁はこの町はメルキドであること。初めてゴーレムを見た時に浮かんだ情景は実際の出来事であったと考える。
同時に襲撃の跡もなく、建物が綺麗な状態で残っているのに人間が全くいないのは何故か、という疑問が新たに頭の中に浮かぶ。

その疑問を消化する暇は与えられず、次の襲撃者が現れた。
屋根の上に乗っていた四匹のがいこつ。
ゴーレムが近付くとカタカタと音を鳴らしながら、竜仁に斬りかかろうと屋根から飛んだ。
その内の三匹は無様に落下し地面に打ち付けられたが、残りの一匹がゴーレムにしがみつき、竜仁に攻撃をくらわせようと剣を振った。
「うぎぁっ！」
切れ味の悪いなまくらの剣だったが、鎧も装備していない人間に血を流させるのは難しい話ではない。
縦に下ろされた剣は竜仁の胸から腹を斜めに切り裂いた。
傷は浅く命に別状はないが、生暖かい血が体を伝う感触、それと痛みのせいでゴーレムから転げ落ちそうになる。
なんとかこらえて体勢を整え直すも、がいこつは再度竜仁を斬ろうと剣を構えていた。
「てめっ！　止めろ！」
竜仁のがむしゃらな体当たり。
がいこつは体勢を崩し、そのままゴーレムから落下する。
竜仁も勢いあまり共に落下してしまう。
この高さから地面に叩き付けられたらただでは済まない。
打ち所が悪ければ……死もあり得る。
眼前に迫った死の恐怖に竜仁は目を瞑った。
「あ、あれ？　意外と近い？」
次に目を開けた時、竜仁はゴーレムの掌にうつ伏せで転がっていた。
起き上がるのを確認したゴーレムはすぐに壊れてしまうような物を動かす手つきで竜仁をまた己の頭の上に乗せる。
「ありがとな」
出口まではあとわずか。
死霊達の剣が、毒液が、呪文が竜仁達に襲い掛かるがダメージになるような一撃が届くことはなかった。
そして既に壁が開けた箇所から町を抜ける。

町の外には広い大地が広がり、遠方には禍々しい城が聳え立っていた。

死霊達はもう追っては来ていなかった。

ＶＳしにがみのきし

メルキドの町を覆っていた影は外にまでは広がっていない。
そしてさっきまで散々竜仁達を追いかけた死霊達は影の範囲から出るようなことはせず、追跡を止めて何も無かったかのように各々の居場所に戻ろうとしていた。
「にしてもまだヒリヒリすんな」
斬り跡を擦りながら呟いた。
やくそうなりホイミなり使えればよかったが、望んでも無い物ねだりにしかならない。
死霊の群れの追跡を撒けた今、竜仁は改めて今の状況を確認し、目標を定める。
まず遠方に見える禍々しい城。あれこそが竜王の城で間違いないだろう。あれを目印に脳内地図を思い浮かべれば東西南北を知ることができる。故にコンパス無しでも迷うことはない。
そして西のドムドーラ、東のリムルダールどちらに進むかだが、竜仁には一つ気になる点があった。
アレフガルドの世界地図。記憶が正しければメルキドからリムルダールへの道は陸続きではなかったはずだ。
向かうには半時計回りにぐるっと一周しなければならない。
その道中でドムドーラも通過する。
「だったら最初からドムドーラを目的地に据えていいか」
進む道を定め、ゴーレムに移動を命令する。
だが、メルキドから離れようとする竜仁に向けて紫色の物体は二発、進行方向を遮るようにして何かを射出した。
「うっわぁ、見逃してくれよ……」
深紅の鎧に手には斧と盾。
射出されたものの正体は二匹のしにがみのきしだった。
その内の一匹が竜仁を亡き者にしようと、呪文を唱えようとする。
「あいつ止めてくれ！」
呪文詠唱中のしにがみのきしにゴーレムは右腕を振りかざし、殴り

飛ばそうとした。
しかし、もう一匹のしにがみのきしが前に割り込み、ゴーレムを止めようと盾を構える。
衝突の結果はゴーレムの優勢。しにがみのきしをよろけさせ、空いた体に今度は左腕で殴りかかる。
そこへ飛んできたのは地から昇る炎、ベギラマの呪文だ。
「あちぃ！」
炎に巻かれたのは直線上にいたゴーレムとしにがみのきしだけでゴーレムの上に乗っていた竜仁に炎は届かず。
ゴーレムもベギラマだけでは止まらず、拳の一撃でしにがみのきしの重い体を飛ばした。
殴られ焼かれ、相当なダメージを受けているが、それでもしにがみのきしは起き上がる。
更にベホイミを唱え、傷を癒す。
「モンスターですら回復できるってのに……」
実力、知力共に町の中の死霊とは格が違う強敵。
双方共に引けを取らず、しばらく相手の出方を伺う。
そして最初に動いたのは傷を負っているしにがみのきし。
鎧を装備しているのを思わせない程にジャンプし、竜仁ごとゴーレムの脳天をかち割ろうと斧を振り上げた。
もう一匹のしにがみのきしは地上から、ゴーレムの下半身を斬ろうと鎧を鳴らしながら走り出す。
それに対してゴーレムは、両手に力を込めて、宙にいるしにがみのきしごと地面に叩き付けた。
ゴーレムの怪力によって大地が揺れて隆起が生まれる。
叩き潰されたしにがみのきしは青い光となって消滅。
残った方も逆にゴーレムに接近されて斧を当てる前に叩き潰され鎧が大きく破損する。
瀕死になったしにがみのきしは最期に斧を投げて攻撃するも、ゴーレムの石造りの体を少し削っただけで大したダメージは入らない。
そのままがくりと動かなくなり、青い光となって消える。

「……強ぇ」
竜仁は割れた大地を見て思わず言葉が漏れた。
こんな怪物をようせいのふえを使いつつもたった一人で撃破した勇者に尊敬の念を抱く。
「って、まだ急いだ方がいいか」
紫色の物体は不気味に胎動を続けている。
新たにモンスターが打ち出される前にここを離れる事にした。

ゾンビフィールド・ラン

死霊に支配された世界でも特に変わった地形は見られない。
草原も森林も汚染されたような雰囲気はなく自然な緑が広がっている。
また、毒の沼地はあれど、これは原作にも存在していたし、やたらと広がってる訳ではなかったので特に違和感は感じず。
違うのは出現する魔物だ。
ゴーストやしりょう等の原作にも登場した奴らからくさったしたいやアンデッドマン等のドラクエ1では未登場の奴らまで死霊系の魔物がわんさかといる。
こいつらは皆竜仁に襲いかかり、そしてゴーレムに返り討ちにされた。
死霊系以外で出会った魔物は毒の沼地を這いずるバブルスライム程度だった。
「けど、危なかったのは最初だけだったな」
ドムドーラまでの道中はあと半分というところまで来たが、種類こそ多いものの、しにがみのきしのような単体で強力な魔物には出会っていない。
キメラのつばさは使わずに済むか。なんて考えている頃には橋を二つ渡り終え、アレフガルドの南西に位置する砂漠地帯にまで行軍は進んでいた。
「やっぱここでもお出ましか」
相も変わらず襲い来るゾンビ達。
砂漠に入ったからか新たにミイラ男やマミーが混じっている。
だが、それだけの話でゴーレムに歯が立たないのには変わりはない。
「あと一息だ！　突っ走ってくれ！」
竜仁の命令通り、ゴーレムは障害をものともせず走って走って、遠方にドムドーラのものらしき建物の残骸が見えてきたあたりで動きが止まってしまう。

「お、おい!? どうした!?」
ゴーレムは眠っていた。
その理由はマミーが唱えたラリホーによるものだ。
動かなくなったゴーレムに次々に魔物が集い、竜仁の元へとよじ登ってくる。
その様子はさながらゾンビ物の映画のよう。
次の行動を考えている暇は無い。
竜仁はゴーレムの肩に手を掛けていたミイラ男を踏み台に高くジャンプした。
砂地に足を着けたらドムドーラに向かってひたすらに走り出す。
幸いにもモンスター達の大半はゴーレムに注意が向いており、逃げる竜仁を追わない。
追う奴らもその鈍足さ故にどんどん距離を離されていく。
しかし、進路を塞ぐように回り込んでいる魔物には動きの鈍さは関係ない。
くさったしたいの一匹が近付いてくる竜仁を毒が付着した爪で引っ掻こうとする。
「当たらねぇよっ!」
竜仁は攻撃を繰り出そうとするくさったしたいの横をスライディングですり抜ける。
その際にマミーが呪文を唱えるような動作をしていたので、革袋から木の実を取り出しマミーの顔面目掛けて投げつけた。
この木の実は齧ればカリッと音が鳴る程には硬い。
小ダメージを与える簡易的な投擲武器にはなるが、既に痛みを感じぬ体となっているマミーの行動は止められない。
詠唱が終わると、竜仁の眼前に透明な波紋と泡が浮かんで眠りへと誘おうとする。
しかし、結果はミス。竜仁は眠らない。
更に背後では集っていた魔物達の攻撃で目を覚ましたゴーレムが一発、大きな打撃音を響き渡らせる。
音には竜仁を狙っていた魔物も反応し、わずかに動きを止めた。

「このっ隙に！」
竜仁はドムドーラの町跡地に足を踏み入れた。
当然、人っ子一人おらず、魔物の巣窟となっている。
そして、町の左側に旅の扉による水色の光る渦巻きが発生している。
「あそこがゴールか」
旅の扉を抜ければ、死霊だらけの危険地帯からおさらばできる。
そうと分かれば気を引き締めて、最後の包囲網を突破する為に足を動かす。
伸ばされた腕は回避して、地面から生えた手は飛び越えて、避けきれないような遠距離攻撃は甘んじて受け入れて。
必死に駆ければ旅の扉を踏むのはあっという間の出来事だった。
光の渦が強まり、転移が行われる中で竜仁が見たのは最後まで自分に一撃浴びせようと飛び掛かる死霊達。
それと、遠くで数多の死霊相手に無双するゴーレム。
「ゴーレム！　ここまで護衛してくれてありがとな！」
その声がゴーレムに届いたのかは定かではない。
竜仁はアレフガルドを去り、一切の情報もない新たな世界へと旅立った。

火山拝みし熱森林

猛暑の森

肌に纏わりつくような暑さと湿気。
旅の扉の先はどこを見渡しても葉の緑で覆われていた。
腕を動かしただけでも枝葉が肌を引っ掻く。
人間一人いるだけでも狭苦しい空間だ。
「こっから出るのが先決かね」
何とか通り抜けられそうな道を見つけ腕に切り傷を作りながらも枝葉をかき分け前へ前へ。
自分が出した音以外にも葉が擦れる音が近くから聞こえてくるが、生物との遭遇はなく広い空間に出ることができた。
「うわっ！　お前どっから出てきてんだ！」
竜仁のものではない女性の声。
その女性は茂みの音を聞いて魔物の襲撃に備えたのか刀を構えていた。
「待て待って！　敵じゃないって！」
「……それは、見れば分かる」
女性は握っていた刀を鞘に戻し、一つ吐息を溢す。
竜仁も冷静になって女性を観察する。
そして、髪型や服装からまるで彼女が侍であるかのような印象を受けた。
そこへ茂みから一匹のキャタピラーが飛び出してきた。
竜仁が聞いた葉が擦れる音はこいつが出したものだ。
キャタピラーは二人を敵と認識し、車輪のように体を回転させて飛び掛かってきた。
「やっぱり敵もいるじゃないか！」
女性は再度刀を抜き、ぶつかってくるキャタピラーを横に一斬り。
その一撃によりキャタピラーは三つに切り分けられ、そのまま絶命。血痕を残して消滅する。

「さて、聞きたい事は色々あるが……まずは互い名乗っとこうか。私はサザレ。君は？」
「竜仁っす。ここにはついさっき来ました」
「む、ついさっき？　ってことは……」
サザレと名乗った女性は竜仁が通った茂みの中へと潜る。
しばらくして葉っぱが髪や服に付いてるのを気にせず戻ってきたサザレは誰が見ても良いことがあったと分かるような表情をしていた。
「竜仁！　これは大手柄かもしれんぞ！」
「え？　な、何が？」
「君が使った旅の扉だよ！　そこは未発見のはずだ！」
今竜仁の手には手柄となるものが握られている。
しかし、自分一人で手柄を独占しようとは思っていない。
一つ、良いアイデアが頭に浮かんだ。
「だったら、旅の扉は二人で発見したって事にして、この世界について色々教えて欲しいです。訳あって自分の記憶が曖昧で……」
「いいの!?　それくらいお安いご用だ！　っと、はしゃぎすぎたな」
二人の周りにはキャタピラー×3、メラリザード×2の魔物の群れが集っていた。
相手がどう動くか全神経を集中させて逃げる構えを取る竜仁に対して、サザレはさっきまでとは裏腹に冷静な面持ちだった。
「竜仁、戦えないんだったらしゃがんでな」
竜仁はサザレに全てを委ねるつもりで指示通りに体を屈めた。
襲い来る魔物に対して、サザレは刀をぶんまわした。
それだけで不用意に近付いてきた魔物は撃破。
メラリザードの一匹は離れた位置から火の息を吐いて攻撃してくるが二人にさほどダメージは通らない。
サザレはメラリザードの元まで駆け寄り、刀の一撃を浴びせる。
それで魔物の群れは全て撃破。
「ここは魔物も出るし場所を変えようか。付いてきて」
サザレは手招きをしてから傾斜となっている森を下へと走ってい

く。

竜仁も遅れまいとそれに続いた。

サザレは知っている

鬱蒼と生い茂る森を抜けると、歪な形の黒い岩の地面が広がるエリアに出た。
竜仁は自身の記憶からこの形状は溶岩が固まって出来たものなのだと判断する。
魔物が生息していないこともあってか、腰を下ろして休憩する冒険者らしき一団の姿もあった。
しかし、竜仁はとある違和感が頭に浮かび、それが拭いきれずにいた。
森を抜けたはずなのにいまだに辺りが薄暗い。
世界ごとに時間が異なるのかとも考えたが、空を見上げると黒煙が天を覆い尽くし、光を遮っているのが原因だと分かった。
黒煙の発生先を目で辿ると、遠方に雄大な火山が目に映る。
明るく輝く溶岩を流しているその景色の美しさに思わず竜仁は見入っていた。
「すごいよね。私も初めて見た時は思わず見惚れたよ」
しばらくは眺め続けていられそうだったが、サザレを待たせるのも悪いと思い、程程に切り上げる。
「ところで、どこに向かってるんです？」
「シズニアンって町に繋がってる旅の扉さ。こんな暑いところに長居はしたくないでしょ？」
「そりゃもちろん。ん？　じゃあサザレさんは何しにここに？」
「小銭稼ぎ。これがそこそこの値段で売れるっぽくてね」
サザレはそう言いながら束ねられた薄紅色の小さな鱗をひらひらと見せびらかす。
「それと、さんは無理に付けなくていい」
「じゃあ、サザレ……姉さん？」
「増えたね」
その旅の扉までは少し距離があるようだったので、移動の間に竜仁は自分の置かれている状況、すべき事をサザレに説明した。

「記憶が曖昧な割には結構覚えてることあるんだね。まぁいいや」
一拍置いてから話は続く。
「まず日本ってのは見たことも聞いたこともないな。この辺の世界から辿り着ける所にはないと思う。それから魔物達の住める場所か……これはお偉いさんと話付けないといけないね」
「お偉いさんってのは王様とか？」
「そこまではいかないかな。会うのはギルドマスターだ」
「なるほど。どんな人かは知らないけど」
「というか竜仁、町については何も知らないよね。私が案内してやるよ」
シズニアンという名の町にギルドマスターなる者。
どちらも未知の存在だが、その地を知る者が共に居てくれるのは非常にありがたい。
竜仁はその善意に素直にあやかることにした。
「他に何か聞きたいことある？」
「あ、そうだ。今更だけど俺の話って信じてくれてるの？」
「そりゃあね。実の所、君みたいな人の話をは前に聞いたことがある」
「え!?」
「私も詳しくは知らないんで情報くれって言われても無理だけど」
二人は話をしている間にも次の旅の扉が見える範囲まで進んでいた。
自分と似た境遇の人間がどこかにいる。
もし、その人間が同じ日本出身だとしたら帰るための重要な手がかりになり得る。
竜仁はその情報をしかと記憶して、旅の扉を踏んだ。

ギルドの町シズニアン
シズニアンの町、夕～夜

シズニアンには王はおろか、町長と呼べる人物すらも存在しない。代わりに冒険者ギルド、魔術師ギルド、商人ギルド、正義ギルドの四つのギルドが協力、もとい牽制し合って秩序を保っている。

今回会いに行くギルドマスターは冒険者ギルドのタムオーン。これからアポを取りに行く。

竜仁は夕暮れ時の町を歩いている中、サザレからこのような説明を受けた。

ただし、目線は現代日本では見られない町並みや、道行く人々へと向けられていた。

「話聞いてるか？」

「き、聞いてる！　あれでしょ？　タオムーンさんにアポ取りに行くんでしょ？」

「少し違う」

冒険者ギルドがあるのは町の西部。

通ってきた旅の扉は正反対である東側にあったようで、それなりに歩かされるが、それでもまだ日が落ちきる事はない。

それともう一つ、竜仁は西に進むにつれてどこかただ者ではないような人間が増えてきたと感じる。

角付き覆面を被り×型のハーネスベルトを付けた上半身裸のお馴染みあらくれを見た時は思わず声が出そうになった。

「この辺には犯罪者紛いの奴もいるからね。スられないよう気を付けなよ？」

「生憎無一文なんで、そこは問題ないな」

「おまっ、それはそれで大問題だぞ!?」

約半日の間にもたくさんの魔物が倒れて消える瞬間を見てきたが、お金（ゴールド）らしき物を落としていった所は一度も見ていない。

当時はそこまでファンタジーではないのかと軽く見ていたが、サザ

レに指摘されて初めて一つの問題に気付いた。
「今日の宿どうしよう……」
ゲーム内では宿屋代に困った事が無かったのも気付くのを遅らせる原因になったのであろう。
竜仁の首に冷や汗が流れる。
野宿するか？　いや、持ち物を売れば足りるだろうか？
「私が出そうか？　後で返してもらうけど」
そこへ出された助け船。
竜仁は迷うことなく船に乗ることだろう。
「本当にいいのか？　金返さず逃げるかもよ？」
「それは大丈夫。逃がすつもりはないから」
「……ホラー的なアレ？」
「さぁ？　どうだろうね。っと、ほらここだよ」
周りの建物と比べると一回りも二回りも大きな木造建築物。
もうじき夜になるというのに忙しなく人の出入りが行われているこの場所が冒険者ギルドのようだ。
斧を担いだ厳つい大男や、緑色のローブを身に纏った魔法使い風の女性。竜仁よりも背が小さい少年？も通った。
外にも漏れる賑やかな話し声を聞けば、中は活気に満ち溢れているのだと容易に想像できる。
実際に中に入れば当たり前だが喧騒はより増す。
「あー、聞こえる？」
「なんとかぁ」
「こっちだ。カウンターまで行くぞ」
何かの会話、笑い声、怒号。
人間のあらゆる感情が飛び交うこの場では隣のサザレの喋ることすらも聞き取りずらい。
例えば怒号が飛んできた方に目をやれば、二人の男による取っ組み合いの喧嘩が繰り広げられており、それを煽る野次馬が集っているのが見えた。
その間にもサザレとの距離が離されており、慌てて彼女の後ろを付

いて行って、カウンターの前まで来れば、既に受付の女性とサザレで話を始めていた。
「今日はどのようなご用件で？」
「タムオーンさんに報告したいことがあってね。今日はアポ取りに来たんだけど」
「おっと、ギルドマスターならついさっき用事で出ていってしまいましたね」
「ありゃ、入れ違いか」
「ひとまず用件は伝えておくので、ご足労ですがまた明日いらしてください」
「だってさ、竜仁。話終わっちゃった」
「俺出る幕無かった」
今日のやること終わり。
と、ほぼ同時に竜仁の腹の虫が鳴る。
恥ずかしいことにその音はサザレにも聞こえたようだ。
「腹ごしらえ行くか？」
「そうするわ」

シズニアンの町、夜、酒場

ギルドを後にした竜仁が腹ごしらえをする為として連れてこられたのは近場にあった酒場。
場所柄か、あるいは酒に煽られたせいなのか血の気が多い人間が多い。
店の扉を開けた時には、既に店内で取っ組み合いの喧嘩が勃発していた。
「あれはそんな珍しいもんでもないよ。冒険者にとっては日常茶飯事だ」
二人がテーブル席に座ると、店員の女性がメニュー表を持ってきてくれる。それが中々に分厚い。
パラパラとページをめくってみれば分厚さ相応の種類のメニューがあるのが見えた。
「店員さん、先にビールを頼むよ。竜仁も飲むか？」
「俺はいいや。そもそも飲めないし」
ビールは注文後間も無く木製のジョッキに入れられて運ばれてくる。
竜仁には冷水がこちらも木製ジョッキに入れられた状態で提供された。
中身は酒ではないにしろ、自分がゲーム内でしか見たことないような酒場で飲んでいるのだとより感じさせてくれる。
それから種類豊富なメニューの選択に悩ませながらも、竜仁はビーフシチューとチーズフォカッチャを注文。
サザレはポークチョップとパンプキンパイを注文した。
「それでさ、さっきの逃がすつもりはないってのはどういう事なの？」
竜仁は水を飲んで一息ついてから聞く。
「うぇ？　そのまんまの意味で捉えもろていいよぉ。君の旅路に付いていくんだ。よぉは暇潰しぃ」
「酔った？」

「そんな訳ないじゃん。クヒヒ」
真面目に言ってるのか酔いどれの戯言か。
サザレは既にジョッキのビールを飲み干し、顔を赤らめている。
竜仁は聞き流すことにした。
しばらくして料理が運ばれてきて、そのタイミングでサザレはビールのおかわりを頼んだ。
料理の味は普通に美味。だが、日本でも店に行けば普通に食べられそうなものだった。舌に合う味だったのは竜仁にとって良き事である。
料理を堪能している間にも新たな客が店の扉を開く。
それだけなら変な話ではないが、竜仁が思わず手を止める程に気になったのは客の様相。
三十、四十代位の男で、サラリーマンような紺色のスーツを身に纏っている。それだけでも酒場ではミスマッチなのだがその男、静かにだが怒りを抱いているように見えた。
そこへ絡みに行ったのは若く柄の悪そうな酔っぱらい。
「よぉ、おっさん。湿気た面してんじゃえねぇか。酒も不味くなっちまうぜ？」
そう言って馴れ馴れしく肩を組む。
仲間なのか数人の周りの男もやいやいと囃し立てる。
「止しとけ」と思った竜仁が次に見たのはスーツの男が酔っぱらいの組んできた肩をナイフで突き刺すところだった。
ナイフは本物のようで、刺さった箇所から血が垂れる。
そして酔っぱらいは声を出す前に力無く、床に倒れた。
「え!?　さ、殺人現場!?」
「落ち着きなよ。寝かされてるだけだからぁ」
冷静になって見ればわずかに体が動いているのが分かり、ひとまず死んだわけではないと確認できる。
「ラリホーでも食らったのか？」
「今のはスリープタガーだ。呪文ではないよ」
スーツの男は自分が刺した酔っぱらいには興味も無いのか全く見

向きもせず、お気に入りの席でもあるのか迷い無くカウンターの前まで歩いて行った。
倒れた酔っぱらいを起こそうとする仲間に対しては他の客から「あいつが機嫌悪い時に近寄っちゃあいかんよ」「最近ここに来たばっかかい？　なら知らんくても無理はねぇな」と、からかわれている。
有名人のようだが、竜仁は当然知らない。
「実際あのおじさん、誰なんだ？」
「私達が会おうとしたタムオーンさんだね」
「それマジな話？」
「マジマジ。酒場にはしょっちゅう入り浸ってるらしいけどお偉いさんだよ」
竜仁は正体を知って、もう一度タムオーンの方に目を向けた。
彼は一言も喋らず、ジョッキの酒を煽っていた。
さっき繰り広げられた光景を見て声を掛けに行く勇気はない。
なので今日は夕食を楽しむことにして、物語が進むのはまた翌日

シズニアンの町、朝、ギルド

ゆうべは　おたのしみでしたね。
昨日出会った男女がそんな仲になるわけないが、宿屋でぐっすり眠った二人は朝からギルドへと足を運んでいた。
早く来たおかげか昨日アポを取ったおかげかギルドマスターのタムオーンの元へはすぐに案内される。
「タムオーンさん、お客様ですよ」
案内してくれた女性が扉をノックしながら呼び掛けると、中からしゃがれた声で「入れ」と一言返ってくる。
それから扉を開くと一番に入ってきたのは鼻への煙草の匂い。
「し、失礼します」
「おう。まぁそこに腰かけてくれよ」
タムオーンは空いているソファを煙草で指す。
竜仁とサザレはそこに座り、案内の女性は閉められていた窓を解放してから部屋を後にした。
部屋には三人になり、タムオーンが煙草の火を消してから話を切り出した。
「用件はなんだ？」
「あっとですね。新しい旅の扉を発見したのでその報告に来ました」
「へぇ？　そりゃどこだ」
暑くてじめっとした森の茂みの中。
竜仁が持つ情報はそれだけで、森の地図が頭に入っておらず明確な位置を言えない為、言葉に詰まる。
そこを代わりに説明を繋げてくれるのはサザレだ。
「場所は熱森林ハテラ。扉の位置は……地図が欲しいです」
「分かった。ちと待ってろ」
タムオーンは本棚から一冊の本を取り出し、その場でパラパラとページをめくってから間も無く、二ページに渡って書かれた地図、熱森林ハテラの地図を竜仁達の前へと差し出す。

「この中腹の……道が上と左とで分かれる所の茂みを通った先にありましたね」
「あぁ、その辺か。行くの面倒だし暇な奴に向かわせるとするかね」
タムオーンは地図を手に一旦部屋を出る。
3、4分経って戻ってきた時、地図は誰かに渡してきてるのでその手には無かった。
「さて、今さらだが小僧。お前何者だ？」
竜仁はそう言えばまだ名乗っていなかった事に気付く。
手遅れかも知れないが、後の交渉の為にも最低限の礼儀として名乗ることにした。
「竜仁です。この町には昨日来ました」
「道理で見た記憶がねぇわけだ」
タムオーンが疑問に思ったのは竜仁が冒険者としてはあまりにも弱そうだという点。
冒険者を束ねる立場上、ある程度は街を拠点とする冒険者の顔は把握しており、もし竜仁のようなのがいればいやでも記憶に残るはずだ。
そもそもただの町民ではないか？
だったらはじめからこんな所には来ない。
「例の旅の扉の先から来て、サザレ姉に案内されて……今に至りますね」
「あっ、その呼び方で定着したんだ」
「となると訳アリっぽく感じるな。あれか、家出でもしたか？」
「家出はしてないっすけど、頼みたいことはあります」
「聞いてやろう」
「安住の地を求める魔物達をここに住まわせたいなと」
それを聞いてタムオーンは困ったような表情で頬を二、三回指で掻く。
「お前の気持ちを無下にするようで悪いが、そりゃ無理だ」
「えー!?」
先に驚いたのはサザレ。

竜仁はあっさり断られたのよりもそっちで驚く。
「タムオーンさんなら何とかしてくれると思って連れてきたのに……」
「お前は俺を何だと思ってんだ」
「権力者です」
「……その通りだな」
タムオーンは親指だけを立てて、壁に並んだ本棚を、北の方角を指す。
「俺はともかく、ウィンターの頭でっかちが許してくれねぇだろうな」
「ウィンターって誰？」
竜仁の頭の中には冬の景色が思い浮かんでいる。
「正義ギルドのマスターだね。町の平和を第一に考えてるよ」
「だから魔物は絶対住まわせてはくれないだろうな」
「そうなると……」
「次を考えるのはまだ早い。ここから近い魔物が住める所を教えてやる」